

## フランス林学とドイツ林学\*

今 永 正 明\*\*

## 1. 世界の生態気候区分

まず図-1をご覧頂きたい。これは吉良龍夫氏<sup>7)</sup>が乾湿度と暖かさの指数によって世界の生態気候の区分を行ったものである。ここで湿潤で、暖かさの指数(月平均気温5℃以上の月を、植物の生育できる期間と考え、その期間について、月平均気温から5℃をひいた値を積算して求めたもの)が85から180間に位置する暖温帯広葉樹林帯を図上で追ってみよう。

この分布は北半球では、中国南部、日本の中南部、アメリカ南東部、西ヨーロッパ地中海岸にみられ、南半球では、ブラジル南東部、オーストラリア南東部、ニュージーランド北部等にみられる。すなわちこれは、地球の南北中緯度の帯状ベルト帯の一部を構成していることがわかる。

ここで日本をみると、この世界の生態気候区分図上で大きく二大別されている。すなわち、前述した暖温帯広葉樹林帯中の照葉樹林帯に属する中南部と、暖かさの指数45から85に位置する冷温帯落葉広葉樹林帯に属する北部に分けられる。

つぎに目をヨーロッパに転ずると、ドイツを含む西ヨーロッパの広くが我国の北部と同じ冷温帯落葉広葉樹林帯でおおわれていることがわかる。そして、フランス南部、イタリア等が暖温帯広葉樹林帯の中でも冬に雨のある硬葉樹林帯となっている。

## 2. 照葉樹林帯とブナ林帯

この図が教えるものは何か。それはひじょうにマクロな見方であるが、我国は世界の生態気候区分によって大きく二分されること、そして我々が林学の先進国としてその教えの多くを学んできたドイツは、その北の部分に属しているという事実である。

ところで照葉樹なる言葉は文化論としてはなばなく登場した。中尾佐助氏の照葉樹林文化論はつとに有名であるし、氏はさらにその著「現代文明ふたつの源流<sup>6)</sup>」において照葉樹林文化と硬葉樹林文化を論じている。これに対し近年ブナ帯文化論が台頭してきている<sup>9)</sup>。

このように照葉樹林帯、ブナ林帯は、文化論上でも特色ある地帯であって、そうした文化が生まれるもとに先に述べた生態気候の差があると考えられるのである。

---

\*French Forestry versus German Forestry

\*\*Masaaki IMANAGA, Faculty of Agr., Kagoshima Univ., Kagoshima 890 鹿児島大学農学部

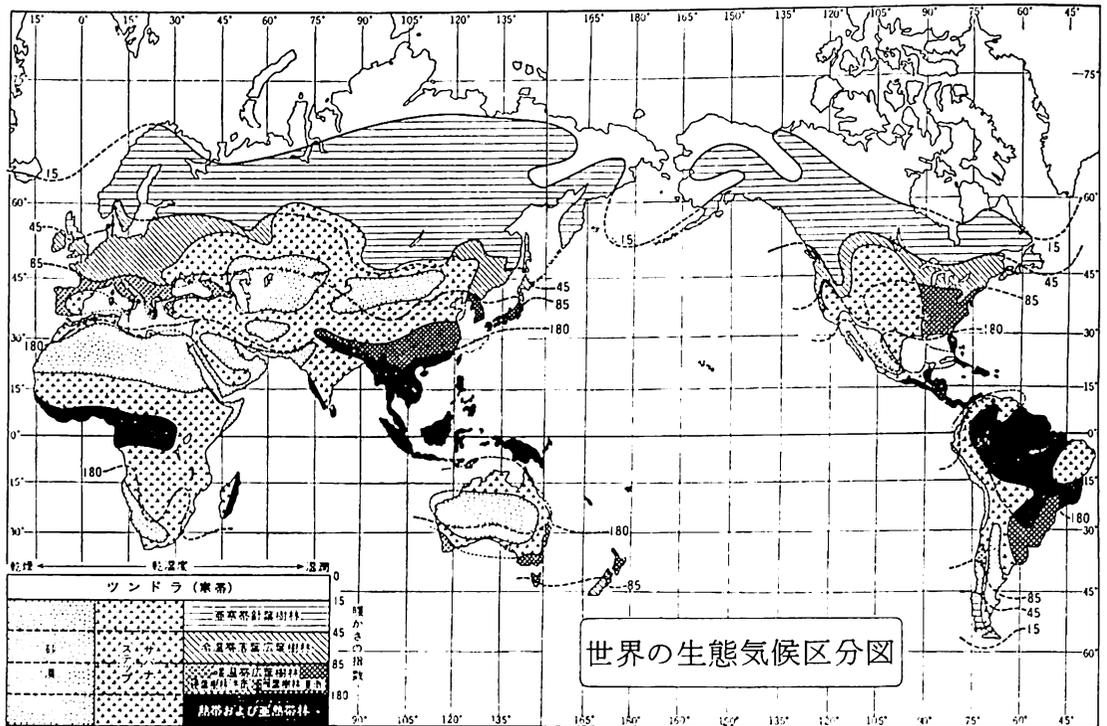


図-1 世界の生態気候区分図<sup>7)</sup>

### 3. 東洋林学と西洋林学

ここで私事にわたるが、筆者はこのブナ林帯に属する山形で13年間を過ごし、照葉樹林帯の鹿児島に来て5年が経過した。いわば文化の異なる異国へ来たことになる。この照葉樹林帯に移り住んで3年目の頃であった。佐々木高明氏の書かれた「照葉樹林文化の道<sup>8)</sup>」を読んでいて、一葉の写真が目にとまった。それは「中国湖南省でみつけた照葉樹の残存」とされ、そこには、長沙市郊外のホテルの池に影を落とす照葉樹の繁みが認められた。長沙市は鹿児島市と友好都市という縁もあり、さっそく長沙市を訪れてみたのである。そしてその市の郊外、岳麓山において照葉樹林に出会うことが出来た。

「ここ岳麓山の照葉樹林は乾燥地型のものであった。降雨量は鹿児島の約半分である。最上木はフウであったが、主木はアラカシやシイ類が占めている。副木としては、ハイノキ、モチノキ、ツバキ、ヒサカキの類がみられた。下層にはモウソウチクやネズミモチの層がみられ、また下草として、シダ植物などが認められた<sup>9)</sup>」。しかしこの旅で本格的な照葉樹林がみられたのはここだけであった。「〈東亜半月弧〉の地域から揚子江の江口部を結ぶ線より南の地域、つまりこの長沙周辺を含む江南の地域は、かつて照葉樹林によっておおわれていたと推定されている。…(中略)…だが、開拓に依って、ほとんど完全に森林を失ってしまっている中国、とくに中国屈指の大

農業地帯になっている江南の地域に、かつてほんとうに照葉樹林がひろがっていたのだろうか<sup>9)</sup>。氏は先述した長沙市において照葉樹の残存を確認するが、現在、中国における照葉樹林はきわめて少なくなっている。

医学の世界には西洋医学と東洋医学が存在する。林学にも西洋林学と東洋林学があればおもしろいと思う。東洋林学はいわば「ハリ、キュウ」の林学であり、「ツボ」を抑える林学であって良いようにおもう。今現在、照葉樹林帯が中国に広大に広がっているなら、おそらくこうした森林を取り扱う技術もすすんでいたと思われる。そしてそれこそが東洋林学であったらうと夢想している。しかし今やその中国で森林そのものの多くが消滅してしまっているのである。

#### 4. フランス林学とドイツ林学

かつて梅棹忠夫氏<sup>10)</sup>は文明の生態史観を発表し、世人に衝撃を与えた。氏の生態史観は、わが国と西ヨーロッパでは平行進化による相似の文明が発生し、展開し、今日にいたったという説であって、その相似性をもたらしたものが、適度の降雨量と気温に恵まれた温帯にあるという生態学的位置の相似性にに基づくというものであった。この説の基礎となるユーラシア大陸の東端と西端に位置する日本と西ヨーロッパが生態学的に似た位置にあることは先の図によっても明らかであって、我々林学者がヨーロッパに林学を求めたことは正しい道であったと思われる。明治以降多くの林学者がヨーロッパに学び、特にドイツ林学を学びつづけ、その流れは今に至っている。

ところがここに注目すべき事実がある。明治初期に林学を学び、フランスナンシー派のアル・ヌーボーと関係の深い画家となった高島徳三(北海)のことである。彼は明治初期フランス最高の森林学校のあるナンシーで林学を学んでいる。その彼がナンシーを訪れた時、当時の校長は「一金ノ植樹費ヲ置カズ是山林経済ノ主旨ニシテ営林家ノ主務タリ」と述べたという。そして美良の人工林を期待していた高島らの見学者にとって、すべて天然林の保育のみによる森林であったことは驚きであった<sup>5)</sup>とのことである。時代は異なるが、筆者も同森林学校の校長より、フランスの森林取り扱いの要点は「自然を加速させる」ことにあると聞いている。そしてその「自然を加速させる」という一言にフランス林学の真髓が秘められていると思われるのである。

フランスの森林の取り扱いについては我国では比較的知られることが少ない。その理由はフランス林学の研究者が少ないことにもよるが、従来フランス林学はドイツ林学の影響下にあり、ドイツ林学を学ぶことが先決であるという風潮が我国でみられたことによるのであろう。事実1824年にフランスのナンシーに森林学校が設立されるが、この地が選ばれた理由がドイツに近いことであったといわれる。18世紀末はドイツ林学の飛躍の発展期であり、この森林学校の初代校長ロレンツはドイツからその多くを学んでいる。しかしフランスにおける林業、林学は独自の発展をとげる。ロレンツの一番弟子たるバラードは後に校長の椅子を占めるが、彼は「自然を模倣し、自然の作業を促進する——それが育林の基本的準則である<sup>1)</sup>」と述べており、これは現在においてもフランスの森林施業の基本方針とみなされるのである。

法正林で代表されるドイツの林学，林業が人工造林による森林造成をおしすすめ，規格型の林業を発展させたのに対し，フランス林業は天然更新を主体とした，自然流の林業を発展させた。西ドイツがかつて広葉樹が主であった森林を，ここ 200 年間に針葉樹主体（面積で約 7 割）で再造成したのに対し，フランスでは逆に広葉樹施業を重視し，現在も広葉樹が 7 割程度を占める森林構成となっている。

## 5. フランスの森林施業

フランスでは 1985 年の法律によって，森林の質的向上と保護が強く打ち出され，また国有林は国家的な森林の取り扱いのパイロット的な役目を担う重要な立場であることが確認された。1986 年に発表された「国有林管理要綱」によると，森林取り扱いの基本方針が 3 つあげられている。

すなわち

- i. 森林のもつ諸機能の保護と増進
- ii. 国土保全，管理面からの森林の見直し
- iii. 他機能と調和した生産性の向上

である。こうした基本方針をもとに漸新な方向が随所に認められる<sup>3)</sup>。ここで特記すべき点を整理してみよう。

第一に生態的機能重視の姿勢である。「生態的機能は常に選択しなければならない基本である。」とされている。この生態的機能には水保全なども含まれており，広く社会的機能を重視する姿勢と考えられる。この機能重視のため他の機能との調和については，「この機能は必ずしも森林のもつ他の機能とあい入れないことはない」とされており，広葉樹の天然更新を主とするいわゆる自然流の林業によってこうした調和が保たれると考えられているように見受けられる。

つぎに経済的目的として質の高い材の生産を重視していることが指摘される。ナラの前更作業はフランスの特徴ある施業であって，ブリアにおける 200 年伐期の高品質ナラ材のための施業事例<sup>2)</sup>などが参考になろう。

ゾーニングについては，生産ゾーン，保護・生産ゾーン，保護ゾーン，レクリエーションゾーン，厳正生物保護ゾーン，それ以外のゾーンにわけられる。この中で保護・生産ゾーンを設定していることは興味深い。このゾーンは環境条件や社会，経済条件によって異なるが，ある程度の保護が必要な地域での生産活動を行うゾーンであり当然一定の制限をうけるとされている。あえて生産か保護かにわけないこうしたゾーンを設けている点にもフランス流が見てとれるのである。

## 6. 照葉樹林施業への道

先述したように世界の生態気候区分によると日本は二大別され，その中央部から南部にかけての大部分が照葉樹林帯に属していた。フランス南部にも同じ暖温帯広葉樹林帯に属する硬葉樹林

帯が分布していることがわかった。またフランスは広葉樹の国であることを前述した。さらにフランスには我国の北部の生態気候区分に合致する部分も広く存在するのである。こうした事実を重ね合わせるなら、我国の森林施業を考えるにあたって、フランス林学は極めて重要な焦点となるといえよう。特にフランス林学の根本思想たる「自然を加速させる」という考え方は、我国の照葉樹林施業にあたって貴重な示唆を与えるものとする。

ここでは施業の中味に立ち入った議論には至らなかった。しかしなにより重要であると考えられることは、今後若い人達がフランス林学を学び、フランス流の考え方を我国の林業に生かして行くことであると思う。そして北方のドイツ林学とともに車の両輪として我国の林学、林業を発展させる力となることが望まれるのである。

## 文 献

- 1) ミシェル・ドヴェーズ (猪俣礼二訳) : 森林の歴史, p. 106, 白水社, 東京, 1973
- 2) 今永正明 : フランスの広葉樹林施業——特にナラ林の取り扱いについて, 日林東北支誌, 33 : p. 84~86, 1981
- 3) 今永正明 : フランスの森林経理, 鹿児島大学演習林報告, 15, p. 1~13, 1987
- 4) 今永正明 : 中国照葉樹林を訪ねて, 随想森林, 16, p. 65, 1987
- 5) 長池敏弘 : 高島徳三の生涯とその事蹟, p. 152, 高島北海展解説書, 下関, 1986
- 6) 中尾佐助 : 現代文明ふたつの源流——照葉樹林文化・広葉樹林文化, p. 1~228, 朝日選書, 東京, 1987
- 7) 吉良龍夫 : 生態学からみた自然, p. 150~151, 河出書房新社, 東京, 1971
- 8) 佐々木高明 : 照葉樹林の道, p. 204~205, NHK ブックス, 東京, 1982
- 9) 梅原猛他 : ブナ帯文化, p. 1~291, 思索社, 東京, 1985
- 10) 梅棹忠夫 : 文明の生態史観, p. 74~111, 中公文庫, 東京, 1974